

若狭の田の神祭り

若狭の農耕儀礼

永江秀雄

若狭は民俗の宝庫ともいわれるほど多くの伝承文化が残されて来た。特に年間を通じて行われる農耕儀礼などの習俗には見るべきものが多かったと思われるが、時代の趨勢、殊に戦後は農業生産とそれを取り巻く社会全体の経済構造の変化から、多くの年中行事も急速に衰退の一途をたどり、農村における昔なつかしい風習やそれを表現する民俗語彙の数々も、今のうちに調査記録しておかなければ、これを伝えるべきすべもなくなってしまう事態にある。

その中で今なお厳然と、サツキヤスミに田の神を祭って子供ミコシ（神輿）を繰り出す行事が、若狭の中央に位置する農村数十箇所に現存することは真に喜ばしい限りである。このたび、小浜市の旧村部と遠敷郡上中町におけるこの子供ミコシ行事を中心に若狭の農耕儀礼について調査したが、到底消滅させるには忍びないような伝承行事が各地に存在したことを多く教えられた。^(注1)先人たちの心を尊び今後これを伝えたい思いに駆られながら、ここにそれらを概観する。

ツクリゾメ 1年を通じ最も早い時期に行われ、極めて顕著に農耕儀礼の要素を示す年中行事として1月11日のツクリゾメがある。これは年頭における農作開始の行事であり、実際の農作業に先立って行われる予祝儀礼である。^(注2)

今その例を上中町天徳寺に見ると、正月の11日には、みんな朝暗いうちから起き出て、家の近くの田の一角にその年の明き方^(注3)（恵方）^{あほう}に向かって男松女松にワカバ（和名ユズリハ）とサカキ（榊）を立て、それに海藻のホンダワラと年末に作り神棚^{かみだな}に供えておいたモチバナをかけて飾る。ここへ「タナカミサン」（田の神様）が降りて来られるのであるという。その前方には箕^みを置いて、箕の中には一升枀^{ます}に白米いっぱいを入れ鏡餅^{かがみもち}を載せ、神様にお供えする。鏡餅の上にはゴマメ（鰯）を載せ「今年もマメで働けますように」と祈る。また、このゴマメは11匹か13匹とし大勢のソトメ（早乙女）を表わすともいわれる。

これらの準備が整うと、家から主人を始め1人ずつが鍬^{くわ}をかついでここに来てお参りし、その手前の田んぼを軽く3回打ち起こす仕草をする。続いて、そこにしゃがんで田植え歌を2、3回うたう。「今年や豊年 穂に穂が下がる 道の小草にも 米がなる」「今年や豊年 穂に穂が下がる 枀は要らいで 箕ではかる」などと。^(注4)

次に、お供えした鏡餅やモチバナなどを主婦の手で家に運び入れる。そして、ここでも明き方に向かって稲扱きの所作をする。すなわちモチバナを一つ一つしごき落とし、これを箕^みで簸^{いねと}ってツクリゾメを終る。なお、このモチバナのモチは神棚に上げておき、6月1日（恐らく本来は旧6月1日）を「コオリノツイタチ」といって、その日に頂いて食べる

ことが近年まで行われていた。ちなみに、三方郡三方町^{きやま}気山でも神棚に飾ってあるモチバナを、同じく1月11日のツクリゾメの日に下げて箕の中で扱き落とし、これを7月1日に^こ煎り（このごろは油で揚げ）神棚に供えてから家内中で頂く。今も続けている家があり、これをコオリノツイタチといっている。

これらは非常に丁寧に行われている事例であるが、同じ集落でも真宗門徒の家ではこのようなことは一切しなかったともいう。小浜市の松永地区（旧松永村）で見られるように、鍬で打ち起こした所へワカバや松を立てる例もあり、上中町^{みしようの}三生野では前年秋の最後の刈り納めのときに取りっておいた稲10本ばかりを、このツクリゾメのとき田を^{ひとくわ}一鍬打ち起こしてそこへ植え付ける形をするという。その他にも方法は村や各家によって様々であり、既に止んでしまった所も多いが、たとえ簡単でも現在も続けている所や記憶を明確に留めている所が、若狭の三方郡から^{おおい}大飯郡に至る全域に極めて多く認められる。

サビラキ いよいよ春が来て田植えの時期になると、昔は若狭の各地でサビラキ（またはサブラキ）ということが行われた。小浜市太良では、最初の田植えのとき田の^{あぜ}畔に栗の木^{みつまた}の三叉になった小枝を立て、白豆（大豆）を^い煎ったものと白米と海藻のワカメ少しずつをフキ（落）の葉に包んでその葉柄の皮でしばり、これを結び^あ合わせて2包みを1連とし栗の枝にかけてつるす。そして、手を合わせ2拍して拝み豊作を祈ってから田植えを始めた。この辺りでは、これをサブラキといった。これと同様の例は、若狭1市3郡のすべての市町村にあり、フキの葉でなく^{（注5）}ホオノキ（朴）の葉を十文字に重ねてこれで大豆などを^{わら}包み、^{さかなし}葉で栗の枝につるす所も広範囲にあった。白米を洗い米として入れたり全然入れなかったり、餅をサイコロ状に切って煎ったアラレを入れたり、ワカメの代りに^{こんぶ}昆布を用いた所などもある。上中町無悪や三方町^{たかつか}気山中村では、この栗の枝に半紙を切って作ったゴヘイをもつけた。小浜市^{おかた}高塚などでは栗の木でなく、よく実のなるヨノミの木（和名エノキ）を用いたという。大飯町岡田でもフキの葉に煎った大豆など入れるのは他と同様であるが、^{たねもみ}種粃の残ったものを搗いた米を入れることになっていたという。また、ホオの葉に赤飯を包んで栗の枝につるす家もあったと聞いたが、珍しい例である。

若狭では、大飯郡高浜町の^{よこつみ}横津海や^{ひかしみづつ}東三松、小浜市^{わくり}和久里、遠敷郡^{ななしよう}名田庄村の^{いのみ}井上・^{しも}下、上中町^{かみよしだ}上吉田・^{うりう}瓜生その他のように、「田植え初め」のこと、またはその日をサビラキといってきた所が少なくないが、実際には上記の通り田植えか苗取り初めのときに、栗の枝に煎った大豆をつるしたりなどして豊作を祈る行事のこと、更にはそのつるされた大豆などの包みそのものを、サビラキまたはサブラキと呼んでいる所が、三方郡を始めとして多くある。フキやホオの葉に包まれたこのサビラキ（サブラキ）を、ソトメさん（田植えをする女の人）のコビル（間食）にしたとか、その日の夕方家へ持ち帰って家族でいらい子供にも食べさせたという所もある。子供のころ、これを頂いて食べさせてもらうのが楽しみだったという思い出を語る人々が多い。

くまの
小浜市熊野でもこれと同様のものを作ったが、田植えの前もって大安の日を選びこの「サブラキをした」という。小浜市東勢^{ひがしせい}では最初の田植えの朝、苗の小束をつくり洗って家の神棚に供え豊作を祈る。このことをサビラキといい、この苗を下げて田植えの一番初めに植える。その日が暦の上で良い日でないと、ここでも前もって大安の日にサビラキをし、これを仮植しておいたという。このような例は他にも少なくなかった。

サビラキ・サブラキの他に、田植え初めのことをワサウエ、またはサエタテ等という所がある。ワサウエは上中町でも小浜市でも広い範囲に使用されていたが、これは三方郡にも及んでいる。また、サエタテ（サイタテとも）という語は三方郡の美浜町・三方町で多く用いられ、三方町にもあるサイタチが上中町下野木^{しもぎ}にもあったし、小浜市遠敷で今もサイタテが聞かれる。三方町^おなどでは初めての田植えをサエタテといい、このとき前述と同様にサブラキを作って立て、その前に稲12株を植え豊作を祈ってから田植えを始めるという儀礼がある。

上中町上野木^{かみのぎ}では田植えの前日か当日の早朝にサブラキを作り、これに稲の苗2、3本を添えて神社に持って参り豊作を祈った。地域によって形式は色々であるし、また、丁寧な儀礼の止んでしまった所が多い。田植えの日の朝、御飯にキナコ（豆の粉）をかけて神仏に供え、このように稲の花がよく付きますようにと豊作を祈り、家人も頂くという風習も各地に多く伝わって来た。

サナブリ 田植え納め、すなわち各家々で田植えが完了したとき、これをサナブリとかサノボリ、あるいはシマイダなどといって、その喜びと感謝の気持ちを込めた行事が昔から若狭全域で行われて来た。例えば小浜市栗田^{くりだ}では、これをサナブリといい田植えが終了した日に、家々では赤飯（アズキ御飯）や混ぜ御飯、あるいは餅などを作って神仏に供え、^{やきさば}焼鯖を買うなど色々な御馳走をして休み楽しんだ。小浜市新保では、このとき稲苗2、3本ずつを神棚のそれぞれの神様と仏壇にも供え、大豆入りのオカユを作って供えた。その近くの本保^{ほんぼ}でも、田植えの終了を祝ってミョウガ（茗荷）を入れた白米のオカユを作り、稲の苗と共に神棚に供え家族も食べたとのことである。このとき稲の苗の小束を神棚に供える風習が小浜市の太良・西勢^{にしせい}・上加斗^{かみかと}、遠敷郡名田庄村下、大飯郡高浜町東三松などにもあった。上中町でもサナブリといって、アズキ御飯を炊いたり餅を作って神仏に供え、焼鯖を買って馳走したりなどした。そして、他家へ嫁いでいる娘を呼び寄せ、あるいは田植えに来てもらった人を招待する所もあった。これらサナブリの風習は土地により多少の特異性はあるが、若狭全体に広く行われて来たことである。なお、このサナブリが小浜市の西勢や大飯町^{まんがんじ}万願寺、高浜町^{とび}子生・東三松・横津海など若狭の西部ではサノボリといわれているが、語原を考える上で興味が深い。美浜町には、その家の田植えが1日だけで全部終わってしまう場合に、これを^{（注6）}「サエタテのサナブリ」（植え初めの植え納め）という面白い言葉がある。稲作の機械化が進んだことによって、「サエタテのサナブリ」は以前

より一層多くなっていることであろう。

また、上中町を中心に三方町や小浜市にかけて最終の田植えをシマイダという言葉も多く用いられている。厳密に言えば「シマイダとは最終の田植えそのものであり、サナブリとは田植え納めの行事のことである」と、はっきり本来の意味を区別している所もある。

この他に、ドロオトシとかノアガリという言葉や行事もある。ドロオトシは田植えを終えて手足の泥を洗い落とす意味であり、ノアガリは同じく植え付けを終わった田から上がって来る意味である。これは地域差があるが、上中町山内^{やまうち}や天徳寺では各家で田植え納めのサナブリをした後、集落内全部の田植えが完了すると日を決めて区長からフレが回り、ドロオトシとして村の休日が持たれる。そしてその後、また日を選んでヤスンギョウ（休み業）いわゆるサツキヤスミが行われる。

小浜市高塚では、サナブリの後に各家ごとでドロオトシといって嫁を2、3日実家へ休みに帰らせたりしたという。ここでもその後に日を決めてサツキヤスミを行ない、これをノアガリともヤスンギョウともいっている。このように、最終の田植えとこれに伴う行事を表わすのに幾つもの言葉が、やや複雑に用いられているが、その内容には各家ごとの田植え納めの儀礼的の行事と、村全体の田植え終了を祝う休日の2形態（2段階）があることに留意する必要がある。

上にも触れたように村全体の休日についてはドロオトシ・ノアガリヤスミ・ヤスミギョウなどの名称があるが、外にこれを7月2日か3日の半夏生^{はんげしょう}に行なう所も若狭全体にあり、この休み（祭り）そのものをハゲッショウ（一部でハギッショウ）と呼んでいる所も少なくない。これらの休日に、この季節ぴったりのカシワモチとかチマキを作って神様に供え、海に近い若狭らしく焼鯖などを買って各家で御馳走するという風習が各地に見られた。

近年は田植えが早くなり昔より少なくも1箇月以上早く終わるようになってきているが、以前には6月中に是非とも植え終わりたいとする場合が多く見られたので、7月早々の半夏生は、村中のサツキヤスミとして格好の日であったといえる。上中町天徳寺でも昔はこのころヤスンギョウがあり、ヤスンギョウがすむと「タナカミサン（田の神様）は天へ上がられる」ので、その日から後は田植え歌はうたわないことになっていたという。香川県にあると聞く「半夏半毛^{はんげはんけ}」（半夏半作）という言葉などと同様に、半夏生^{はんげしょう}ごろまでに田植えを終わりたいと努力した百姓の気持ちがよく了解できる話である。

このあと、夏になると稲の病虫害の防除を願って「虫送り」が各地で行われたが、これは現在小浜市宮川地区（旧宮川村）と上中町神谷^{こうたん}で復興継続されている。二百十日が近づくと所々の神社で台風に遭わないよう祈願祭が行われ、今もなお三方郡の多くの神社では「風祈能^{かざいのう}」が奉納されている。秋の収穫期になると、最初に刈り取った稲をアサギ^{あさから}（麻幹）で作った小さなイナキ^{はさま}（稲架）にかけて神に感謝する「ホガケ」の行事が近年まで名田庄村井上^{いがみ}で行われていたし、同様のことが小浜市荒木でも以前には行われていた。最終の稲

刈りを「カリオサメ」といい、アズキ御飯を炊いて神仏に供えるなど若狭全域に続けられて来たことであった。秋も深まると各地それぞれに新穀感謝の祭りもあり、また年間を通じて農耕に関する儀礼は他にも少なくない。

子 供 ミ コ シ の 巡 行

稲作農家にとって最も重要な、また最も気がかりな作業は田植えであるが、これが無事に終わった時その喜びと感謝の気持ちを表わす儀式がサナブリであり、サツキヤスミでもある。既述の通り若狭では、各家ごとの田植え終了時にサナブリ（サノボリ）が行われ、その後に改めて村全体のサツキヤスミ（名称は様々ながら）が行われて来た。このサツキヤスミに小浜市と上中町の多くの集落で、田の神を祭る子供ミコシが繰り出され、各家々や田んぼを回る行事が今に至るまで続けられている。他地方に類例を見ないという若狭のこの祭りについて、このたび可能な限り全地点について調査を実施した。この結果は「各説」において詳述されるが、ここにはそれらの全体について共通性と特異性を探ってみることとする。

分布と起源 後掲の地図にも示した通り、この子供ミコシが繰り出される村は、なぜか若狭の中でも、滋賀県に発し上中町と小浜市を流れて小浜湾に注ぐ北川とその支川流域一帯にのみ存在する。川の流れて従って挙げるならば、まず上中町内の旧鳥羽村に3、瓜生村に4、三宅村に4、野木村に4、計15箇所。小浜市内の旧宮川村に2、松永村に8、遠敷村に7、国富村に4、今富村に1、計22箇所、合計37の集落にある。この外に、過去において同じ行事の存在したことが確認された集落が、上中町に2、小浜市に5、合計7箇所あった。更に上中町の中野木^{なかのぎ}においても昔はあったらしいといわれ、同町関^{せき}にも昔はあったともいう話がある等、かつてこのミコシ行事はより多くの村々で行われていたのではないかと考えられる。(注8)

しかも、現在知り得る限り、これらがすべて北川水系流域に集中するのは何故なのか（ただ1箇所、かつて行われた湯岡^{ゆのおか}は南川に沿う）。北川と共に小浜湾に注ぐ若狭の2大河川の一つである南川は主に名田庄^{なだのしょう}の山間部を通るし、北川はおおむね平野部すなわち若狭としては最大の穀倉地帯を流れているので、北川沿いに田の神祭りがあるのは当然だという見解もある。しかし、ただそれだけではなく、何かこの流域に存在した信仰行事と関連して発生し広まったことではなかったかと憶測するが、今の所その理由は全く不明である。ここで念のため一事を申し添えると、上中町^{さかなし}の無^む悪でも毎年7月7日に、子供ミコシが繰り出され他の多くと同様のことを行なっているが、ここではこれを「ギオンサン」（祇園さん）といい広嶺神社のお祭りとし、田の神祭りの意識を全く持っていない。しかも、その形態が極めてよく他に共通しているので本報告書にも採り上げた。また、田の神祭り

の子供ミコシが現存する最西端の地和久里^{わくり}に近く、昔の竹原村^{たわら}の広嶺神社では古くから若狭一の大祭りといわれる祇園祭りが行われて来た。その時期が旧暦では6月、今は7月であることや、盛大な3基の神輿^{みこし}の渡御^{とぎよ}があることなどから、農村部の田の神祭りのミコシも何らかその影響を受けてはいないか、今後の考究を要すると思う。(注9)

なお、この子供ミコシの分布地帯には終戦後まで乾田の裏作として麦の栽培が広く行われて来た。そのためでもあるのか、小浜市・上中町とも各所で麦藁^{むぎわら}（麦稈^{ばつかん}）を用いてミコシの屋根とか附属品が作られて来た。戦後、稲の早期栽培の普及により裏作^{ことごと}が悉く止んだので、麦藁が入手できなくなったことを最大原因として、昔なつかしいこの麦藁ミコシも今は小浜市の池田^{けんみざか}・検見坂の1基を残して、他ではもはや見るができなくなっている。今回の調査によると、過去に行われたミコシを含めて44箇所のうち、かつて22箇所麦藁ミコシが作られていたことがわかった。これらの所ではミコシ準備の作業の中で、麦藁^む剥きのため子供たちが一番多くの時間を費やしていた。

ミコシと子供 このミコシ行事の大きな特徴として、どこでもすべて子供が主役ということが挙げられる。田植え完了を喜び豊作を祈るのは第一に大人であるが、ミコシの準備や巡行などすべて子供が主体となっている。各説にも述べられている通り、これを青年たちが手伝う所もあり、特に以前には多かった麦藁を用いてミコシを作り上げる仕事には、巧者な大人や青年の手を借りねばならなかった。子供の数が少なくなり子供だけではミコシが手に負えなくなった場合に、青年や父兄が代わってミコシ^か昇^{かつ}き（担ぎ）をしている例が幾箇所にもあるわけである。

この行事に関して子供たちには独自の世界（組織）があり、たいていの集落ではその最年長者を「大将」といい、これがすべての指揮をとり最高の権限を有することが、少なくとも立て前となっている。現在、ミコシの巡行に加わる子供の年齢は村によって異同があるが、恐らく元来は数え年15歳から青年会に入った様子であるので、その下の14歳から小学1年までの子供仲間（昔はこの地方で集落ごとに「子供中」と呼ばれる組織を持っていたようである）の少年たちがその主体であつたろうと想像される。そして以前には当然のこととして、これは男子に限られていた。昭和39年の調査（永江秀雄）によると、上中町の現行15集落においても参加者はすべて男子であった。その後、特に子供の数の減少からやむを得ず、また男女平等の考え方から比較的スムーズに、女兒を加える所も遂次ふえて、今では上中町・小浜市を併せ14集落で男女児合同によるミコシの巡行が見られる。

これら田の神祭りのミコシは、まれな例を除いてはどこでも神社（氏神）を基点として巡行が始められるが、特に小浜市において多くの場合「宿^{やど}」が設けられ、ミコシはここを出発して神社に向かう。このミコシ宿は、子供仲間の大將の家を選ぶ例が最も多い。宵祭りともいふべき田の神祭り^{ほんび}本日の前夜は、ミコシはこの宿に安置し祭られ、子供たちもここにお籠^{こも}りをしたと思われる形態が今も事実として、あるいは話として多く伝わっている。

この宿を拠点にして近くの村のミコシ宿を互いに襲撃し、その前に立てられたサカキを奪い合ったり、いわゆるケンカ（喧嘩）が今も楽しみとして行われている所がある。なお、各家でミコシに供えられたお賽銭（お供えの金銭）は、祭りの後どこでも原則として子供たちが頂くことになっており、同じく原則的にはその分配の方法も大部分の所で「大将」など最年長の子供たちが他から何の干渉も受けないでこれを分け、一部を貯金に残すなどする所もあるほか、大抵は年長者ほど多く年少者ほど少ない階級差をつけている。昔から長幼ともこれを当然の定めとして互いに満足し、共にミコシの行事に励んでいる。

囃し言葉 子供ミコシの巡行の際に、上中町の大部分ではこれに太鼓が伴う。直径数十センチで胴がそれより少し長い太鼓を、竹の棒などにつるして前後2人で担ぎ後ろの者が桴で叩いている場合が多い。そして、小浜市・上中町ともすべてミコシの巡行にはそれぞれ集落特有の囃し言葉があり、子供たちが声をそろえて昔ながらの歌詞を高唱する。村によってはこれをウタともいう通り、もちろん決まりの節まわしがある。詳細は各説に記録されているが、ほとんどその言葉の意味は明確でない。その分布を概観すると、小浜市の大多数地域では「チョーサイトー」または「チョートサイトー」といい、これに「サーイト サイトー」と和する場合が最も多い。これに対し上中町では「ミコーッサーマー オイデーナー」とか最初に呼びかけのような言葉のある所が数例あり、また「イーチニーホー」「イーチニョーホー」などという言葉が入り、後を「サーイヨーレ サイヨーレー」と囃す形が最も多い。この「サイヨー」は「サンヨー」ともいわれており、田の神祭り以外の小浜市の若狭や西津などの祭礼の神輿巡行のときにも聞かれるので、神輿の渡御に際して古来特有の用語があったのではないかと思う。

この小浜市と上中町の囃し言葉は全く別系統のものに聞こえるが、上中町に隣接する小浜市の旧宮川村にも上中町と近い言葉があり、続いて旧松永村の中にも、そして遠く小浜市の和久里にも「サンヨー」とか「サイヨー」がある。更に、松永地区の門前では「チョート サイヨー」などともいわれたと聞くと、両系統は必ずしも全く無関係ではなかったようにも思われる。

また、旧遠敷村と松永村には、ミコシを担ぎ上げて出発するときに特別な言葉がある。各集落ごとに微妙な変化があるが、だいたい担ぎ役のリーダーが「カイチョー ソロタカー」というと、他の担ぎ手が「チンチン」（中村など）とか「チイチイ」（池田・検見坂など）と応じて、一斉にミコシを担ぎ上げるのである。言っている子供たちも何のことかは知らず、ただ決まりの言葉とされている。しかし、まず「カイチョウ」とは平野・中村とか、その他の別の用例でもわかるように、明らかにミコシの「^か昇き手」（担ぎ役）の意味である。しかも、この語は謡曲の「鶴亀」にもある「^か駕輿丁」に相当し、「^か貴人の^か駕籠や輿^{こし}を担ぐことを職務としている者」のことにほかならない。その上、この駕輿丁なる語は平安時代の『延喜式』の中にも記されており、もっと古く『続日本紀』には奈良時代の

宝亀11年(780)の項などにも見えている。

次に、「カイチャー ソロカー」に続いていう出発の言葉「チンチン」などは全く珍しく、ますます不可解と思われるが、今回の一斉調査の結果以下のようなことが推測できた。すなわち、集落を少しずつ移動して行くと言葉にも変化が認められ、チンチン・チイチイはそのいずれかからの転化に違いなく、これらの東に続いて「シッチン」(東市場^{とういちば})があり、その東に「シッチャー」(ヒッチャー)(太興寺^{たいとうじ})、「ヒッチン」(平野^{ひらの})、これらを南に入った奥地の池河内^{いけのこうち}には「シーヒー」もある。ここで思い起こされるのは、昔から行われて来た天皇の出入のときや貴人の通行のとき、あるいは神事のときに、周囲の人を警しめ先払いをする「警蹕」^{けいひつ}の言葉の一つに「しし」とあるということである。これは「シイシイ」とも「シッシ」ともいわれたとあるので、ミコシの出発に際してこの警蹕の声が発せられ、恐らく「シイシイ」が「シーヒー」とも「シッチーン」、「シッチャー」「シッチャーイ」ともなり、「チーチー」「チンチン」にも変化したものではないかと思われる。「カイチャー」にしても「シーヒー」等にしても、古来の厳粛な用語が今に使われていると推測され、他にも例の多い「田舎に古の雅言^{いなか いにしえ みやびこと}の残れる」といった本居宣長の名言(『玉勝間』^{たまかつま})の事実を目の当たりに見聞きする喜びを覚える。(注10)

以上のほかにも、ミコシの囃し言葉のみならず若狭の田の神祭りについて考察すべきことは多々ある。江戸時代の文化末年(1818)ごろに書かれたと考えられる『若狭国小浜領風俗問状答』の中にも「さびらき・さのぼりの事」が記録されており、前述したサブラキ・サナブリとほとんど同じことがそのころも行われていたことを知る。また、「さのぼり」のときには「田の辺りへ立寄る事をも禁ず」とあるが、これは今でもサツキヤスミの日に小浜市の太興寺や太良では「田の神様は休みだから」といい、池河内では「田の神様がおられるから」といって、いずれも田の辺りへも行かないことになっている。なお、この「問状答」には田植え終了後の子供ミコシのことが全く書かれていないが、これは回答者の組屋六郎左衛門が小浜の町人であり、必ずしも充分調べた結果でない旨をことわっていることや、その年に程近い天保2年(1831)の紀年銘を有する確かな棟札が三分一のミコシに残されていること等から考えても、決してその当時ミコシが存在しなかったことにはならない。なお、ミコシの起源と共に、その御祭神について研究することも重要事と思われるが、今は言及し得ない。ただ、全体的に考えてこの田の神祭りは、いわゆる一宗一派にかかわるような宗教行事ではなく、村人みんなが稲作を守り豊作をもたらして下さる神様(あえて換言すれば大自然の恵みともいうべきか)に感謝する行事であり、家の宗派などに制約を受けることなく全戸が参加して来たことも大きな特長である。上中町市場では、昭和50年以来集落内の子供の親睦を深めるため子供ミコシを作り、毎年5月5日に全戸を回っているが、田の神祭りの子供ミコシには既にそのような大きな働きも備わっていたわけである。

(永江 秀雄)

〔追記〕 上掲の拙稿は、昭和60年3月25日付で福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館が発行した『若狭の田の神祭り一小浜市・上中町における農耕儀礼の調査報告』の「概説」として執筆したものを、そのままここに転載したものである。心ならずも稿を改める暇がないため、紙面の都合で書き得なかったことやその後の調査でわかったこと等を以下簡単に注記させて頂くこととする。

〔注1〕 昭和59年、若狭歴史民俗資料館では文化庁の御支援を受け、同庁伝統文化課の天野武主任文化財調査官の御指導を仰ぎ、また民俗研究者小林一男氏（福井県文化財保護審議会委員）を始め9名の調査員の協力を得て、この調査を実施し報告書を作成発行した。

〔注2〕 年頭における農耕の予祝儀礼のことを多くの民俗学書では「田打正月^{たうち}」といっている。柳田國男著『分類農村語彙』にもあるとおり、この語が中国地方などで多く用いられているため、田打正月を代表名としたものに違いない。しかし、この「語彙」集を始め幾つかの民俗学辞典にも「ツクリゾメ」という言葉が挙げられていない。若狭のほとんど全域で用いられて来たこの簡明で優雅な「ツクリゾメ」の存在を私は力説したいと思う。

〔注3〕 上中町天徳寺の三木治太夫家の実例。

〔注4〕 このとき、「田の神さまはオオグチが好きだ」といわれ、例えば「キンタマのツリソが切れて 丹後の港へ流れた それそこで受けておくれよ 丹後の港の舟の衆」とか「十七を（十七歳の娘を、の意）しっかり抱きしめ 森からカラスが ばんばらばん」などという唄も歌ったという。オオグチとは大口話^{おおぐちばなし}のことで、国語大辞典によれば猥談^{わいだん}とある。エロチックな唄を歌うと米を沢山とらせて下さるといわれ、また、田の神様は美しい方なので小綺麗な服装でツクリゾメに臨むと豊作にして下さると言い伝えられて来たという。

〔注5〕 サブラキのサはサナエ（早苗）・サツキ（皐月）・サオトメ（早乙女）などのサと同じで、「田の神のことであり、また、この神の霊力によって稔ると信じられている稲および稲作・稲霊^{いなだま}をも意味する」（石上堅著『日本民俗語大辞典』）と解釈されている。若狭のサブラキは他府県にも例の多いサビラキの転訛で、サビラキとは「サ開き」即ち田植えの始まりを意味する言葉と思われる。

〔注6〕 サビラキのことをサオリという所があり、これは「サの神の降り」て来られることを意味すると説かれているが、サノボリはサの神が田植えを終って天に上られることであるという（『分類農村語彙』その他）。即ち、サナブリはサノボリの転と考えられる。

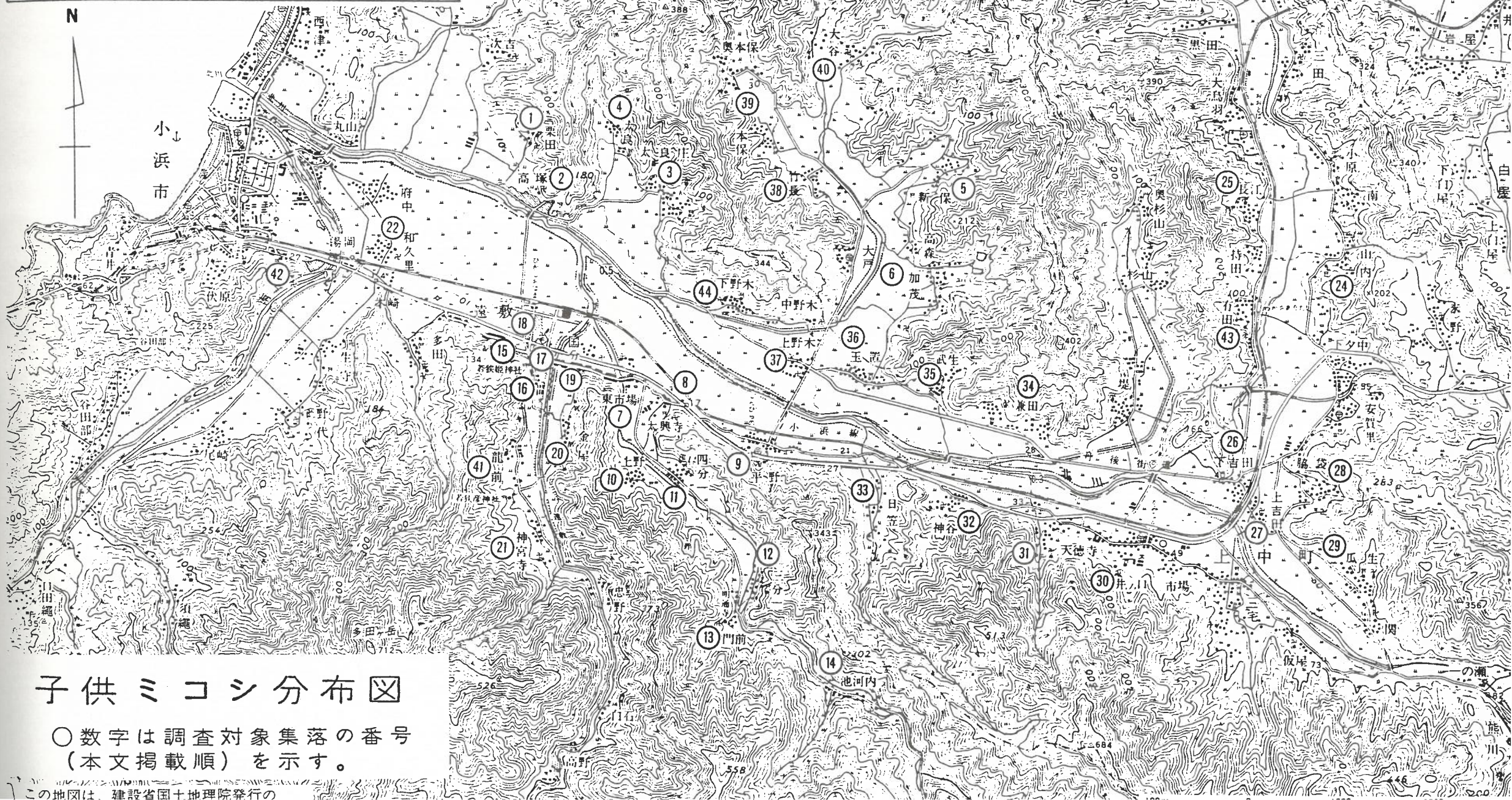
〔注7〕 『日本民俗地図Ⅰ（年中行事Ⅰ）』文化庁編集などによる。

〔注8〕 昭和61年5月25日、小浜市本保では約40年ぶりに麦ワラで作った子供ミコシ行事

が復興され男女の小学生たちによって巡行がおこなわれた。上中町（旧野木村）の老人たちの話により、上中町堤にも昔はこの子供ミコシ行事があったらしいことがわかった。

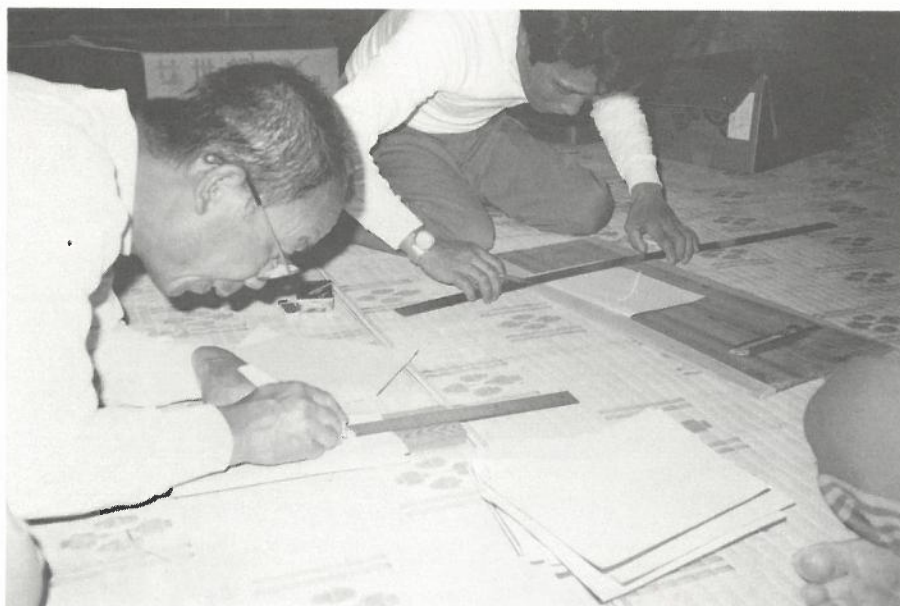
（注9）小浜市和久里の田の神祭りのミコシは昭和10年ごろまで「お川渡り」といって祭り本日の前夜、集落の側を流れる多田川に舟を浮かべてミコシを移し、青年会の連中が高張提灯をともし、笛太鼓の囃しで夜明けごろまで川を上下した。（『若狭の田の神祭り』各説、小林一男執筆「和久里」参照）。これは和久里に隣接する小浜市上竹原に鎮座される広嶺神社では若狭一の大祭りといわれる祇園祭が行われ、神輿が御座船で南川を遡上し陸上をお旅もされた（木村確太郎著『若狭小浜の今昔物語』参照）という祭りの影響を受けているのでないかと想像もされる。田の神祭りのミコシ行事がある上中町日笠などでも広嶺神社を氏神とし祇園祭りが行われていること、上中町無悪の「ギオンサン」のこと等をも考え合せ、更に「祇園信仰とは、元来は農村の虫害災疫を送り出し除く祭事である。田の神である須佐之男命を疫神圧報の神とする考えから、午頭天王・武塔神などを本地とする考えに変わった」（石上堅著『日本民俗語大辞典』）という説もあることから、若狭の田の神祭りの子供ミコシは少なくとも祇園祭りと何らかの関係を有しながら成立されたものでなかろうかと臆測している。

（注10）警蹕の言葉の「しし」の解釈について長年宮中に奉仕された歴史学者是澤恭三博士、近世国文学の権威 中村幸彦博士、小学館日本民俗文化大系編集部の小林洋之助氏から、それぞれ貴重な御教示を賜り、子供ミコシのこの掛声の解明の参考ともさせて頂いた。ここに記して感謝の意を表する。本居宣長は同じく『玉勝間』の中で「かたるなかには、いにしへざまの、みやびたることの、のこれるたぐひ多し」ともいっているが、まことに古来伝承の民俗行事の貴さを痛感させられる。





現在唯一の麦藁ミコシの準備中（池田・検見坂）



ミコシ復興の原動力となった壮年会の熱意（神宮寺）



青年たちも準備万端お手伝い（新保）



お父さん方に習って私たちも御幣づくり
（上・中・下・栄町）



ミコシ宿の正面には早くから松飾り
（和久里）



最古の紀年銘を有するミコシの棟札
(三分一)



新大将によって厳かにミコシへ神移し（天徳寺）



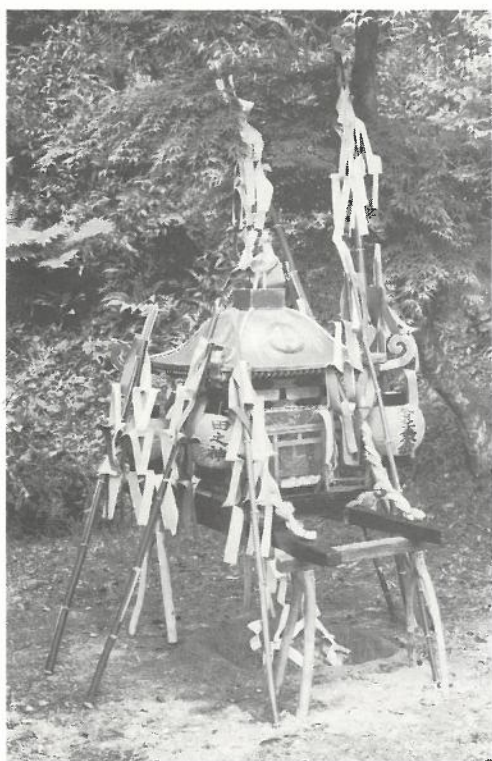
恭しく神移しを始める大将と副大将（長江）



氏神社の神官によるお祓いと神移し（池河内）



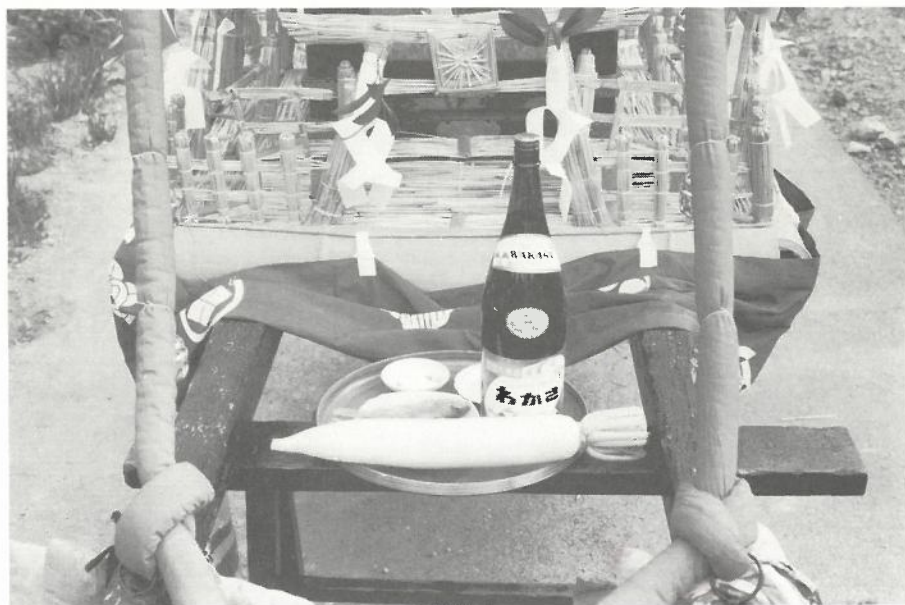
村の寺院住職による神移し前の清め（上野）



ミコシの下に田植えをしたミニ水田がある
(太良)



稲の苗を用いて作られたオタビシヨ (兼田)



宿ではミコシに昔ながらのお供えをする (池田・検見坂)



裏山の上から下の仲間に「見えたかァ」
(高塚)



大幣竹——1番・2番・3番幣
(高塚)



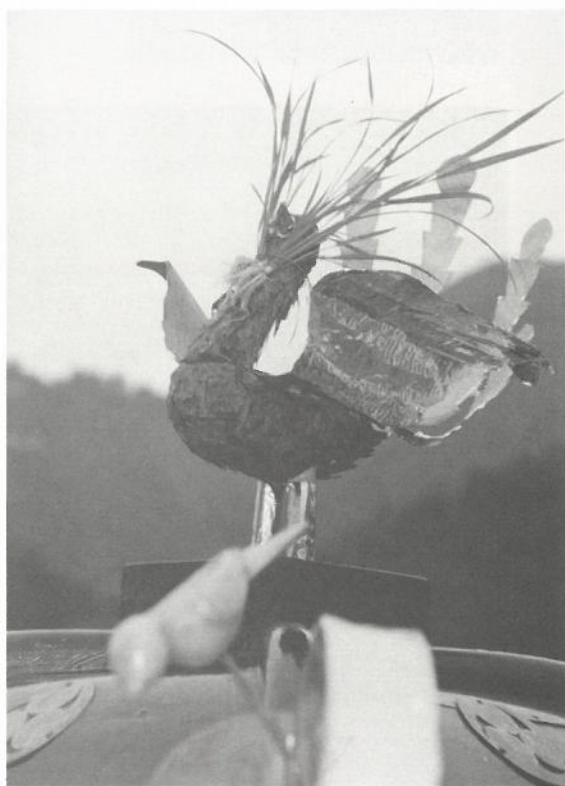
ミコシに先行して「ヤスコノナーイ、ヤスコノオオ…」(金屋)



ミコシは出発前に神社の舞殿を3回走りまわる（上野木）



大人の手助けもかいがいしく
ミコシは神社を出発（神谷）



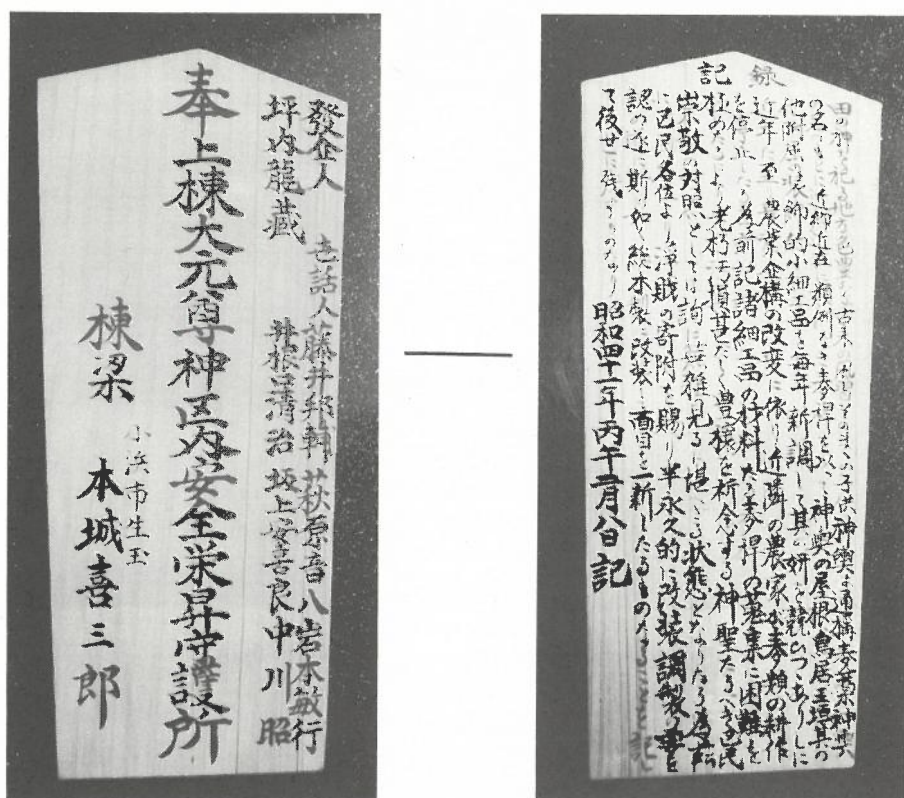
屋根のクジャクには稲の苗がつけてある
（神谷）



朝早く若狭姫神社にお参りしお祓いを受ける（遠敷全区）



5基のミコシが境内に勢ぞろいして実に壮観（遠敷全区）



麦藁ミコシの変遷が記録された棟札（中村）



巡行の先頭に立つ一番御幣の「曲り」(東市場)



巡行中アイスクリームの振る舞いを受けて（加茂）



大将の家が宿となり夕食の接待（太良庄）



ミコシ巡行が終り宿の別室でお供えの集計（和久里）



お供えの分配は昔から大将たちの権限である（加茂）



御幣や織りは川へ流して祭りは終る（東市場）



意気さかな昭和4、5年ごろの子供ミコシ（栗田）